

下田
み

丸
行
分

19
廿一

生命の香

蒲原有明

成
就

五
子



黄昏の影は
一室を
調度に
燦る、
我が魂の
夢ぶる
書かす
かに
然す。

いたづまを
美らふ
あるじ、

われ病めり、
一室は
かくて
彩もなき
妄念の
塵を
薄らぎ
かたに
沈みぬ。

今おぼゆ、
肉の衰へ、
瓶搦の
深き
嘆きを、
今おぼゆ、
わが
身わか
か魂
限りなき
渴きを
切に。

生命の香、
ああ
るの香こそ

成
就
廿一

十ノ廿
成
就



出雲の

石戸

ひそかに思ひ入りぬれ、
一燈と誰かともせし
わが恋ふる切なる望み。
青き瓶、花の墓山微は
燈火に照りてしあれな、
わびしかる花のほひや、
生るの香、あはれ何ぞ入。

一燈と誰かともせし
わが恋ふる切なる望み。
青き瓶、花の墓山微は
燈火に照りてしあれな、
わびしかる花のほひや、
生るの香、あはれ何ぞ入。

外の洞には山風の叫び、
雨相の音、
癒えがての病の夜を
わが恋ふる切なる望み。

癒えがての病の夜を
わが恋ふる切なる望み。

43

2
サキ

秋の歌及 鶴二篇は岩野泡鳴譯詩ふ



秋の歌及 鶴ニ為は岩野泡鳴譯詩ふり



秋の歌 (佛文) 三行へん

秋の 秋の 秋の

長く 長く 長く

寂し 寂し 寂し

胸を 胸を 胸を

切に 切に 切に

色に 色に 色に

かみは かみは かみは

思ひ 思ひ 思ひ

病める 病める 病める

散りし 散りし 散りし

こゝに こゝに こゝに

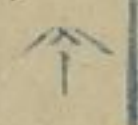
かみは かみは かみは

(エルレイ作)

265

264

鶴 (佛文) 三行へん



鶴

佛文

合行

美なる

面を

霜に

無色

氷河

偉大

昨日

身を

寒き

望み

免る

望み

なし

嗟

寒き

の

偉大

昨日

鶴

とし

知れど

はぬ

身に

その

住まひ

より

免る

望み

なし

嗟

寒き

の

實

倦んじ

あり

そが

水

附ぞ

鳥

とし

域に

負はせ

れたる

然

翼

捕る

國

の

威嚇

は

無垢

美

を

こに

文

書

御書

身

現

なり

無益

の

配

所

マラル

作

有明泡鳴 共にわかせる
續明治文學史中巻にあす



鳥	とし	忌む	域に	身をせとめたる
真白の	もたえ	こえ	頸	ふり拂入
然	翼	捕る	國	の
威嚇	は			
御霊				
冷やか				
配				
無垢なる	美	を	こに	文
輕侮	の	夢	を	着て
無益	の	は		
身づから	現	なり		

マラルメ作

↑

有明泡鳴共にわかせる
續明治文學史中巻にあり

